カール・バルト――彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その１１）

（その１１）「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人」としてのヨブ

（文責・豊田忠義）

（その１１）「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人」としてのヨブについて

この論稿は、『ヨブ　バルト著（ゴルヴィツァー編・概説）』に基づいて、カール・バルトの「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人」としてのヨブについて論じたものである。

「**ヨブは他の人間すべてと同じく誤りやすい人間である**」。したがって、「ヨブ記」は、「**罪なくして罪となり給うた（Ⅱコリント５・２１）イエス・キリストではない者……のドラマである**」。すなわち、「**＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型のドラマである**」。言い換えれば、その神の自己啓示自身に「固有な自己証明能力」の総体的構造を持っているイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「ヨブ記」は、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある**主格的属格として理解**されたローマ3・22、ガラテヤ2・16等のギリシャ語原典「イエス・キリスト**の**信仰」（「イエス・キリスト**が**信ずる信仰」）による「律法の成就」・「律法の完成」そのものであり、「神の義、神の子の義、神自身の義」そのものであり、成就・完了された固体的自己としての全人間・全世界・全人類の究極的包括的総体的永遠的な救済（この包括的な救済概念は平和の概念と同じである）そのものであるところの、自己自身である神としての自己還帰する対自的であって対他的な（完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を本質とする「父なる名の内三位一体的特殊性」・「三位相互内在性」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方（働き・業・行為、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）――すなわち「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間＜**イエス・キリスト**＞――この「＜**真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型のドラマである**」。したがって、それは、「**神には誤りがない。ここで一切がそれにかかり、そのために神自身が力をそえ、うけあった事がらについては、ヨブもまたあやまつことができないし、あやまつことはない真実の証人、真実の証人の基本構造、真実**

の証人の一つの型のドラマである」。このことは、「**『わがしもべヨブ』**（ヨブ記１・8、2・3、42・7-8）**と神ご自身に呼ばれ祝福された**」、「**＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人としてのヨブのドラマ**である」ということを意味している。「**ヤーウェとヨブの交わり〔関係〕」は、神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞が堅持された「自由にある**」。したがって、その「**自由な交わり〔関係〕**」は、常に先行する神のその都度の自由な恵みの決断による「**神の側からの自由な選びと意向によっているもの」であり**、それ故にその常に先行する「神ご自身の働きかけに対する」後続する「**＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人ヨブの側からの自由な服従**〔神語り給うことに対する他律的服従とそのことへの決断と態度との全体性における自由な服従〕**に基づいて形造られている**」。したがってまた、それは、「しもべヨブ」自身の方からの先行した働きかけによるそれではなくて、常に先行する「神がヨブを『真実の証人』として決め、しもべとみなし、認め、現にしもべとしているという交わり〔関係〕であり、ただヤーウェが喜んでそうするからそうである交わり〔関係〕である」。

そのような訳で、神のその都度の自由な恵みの決断により神語り給うが故に神語り給うことを他律的服従と自律的服従との全体性において聞くところの「神ご自身によって祝福されたヨブとは違って」、「秘かに神より上位に置かれている道徳的あるいは法律的な律法を優先する三人の友人たち」は、「神に祝福されることはない」のである。何故ならば、彼らは、神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求もという不信仰・無神性・真実の罪のただ中にあって思惟し語っているからである。このような訳で、前段で述べたところのヨブは、「**神ご自身によって祝福された真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型**である」ことによって、その「**三人の友人たちの偽りを暴露する**」だけでなく、その「**偽り者のためにとりなしをする**」し、また**そのことによって神の祝福を現実化する**「**＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型も示している**」。このような訳で、バルトは、『教会教義学　神の言葉』で、次のように述べている――「まことのイスラエル、まことの民、まことのイエス・キリストの教会」は、実体ではないから、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造の中での、それ自身が聖霊の業（客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」）であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の実在」そのもの）を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書（その最初の直接的な第一の、「啓示ないし和解」の「概念の実在」、すなわち預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣

教、説教」）を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とするというその媒介的・反復的な関係性の中で、終末論的限界の下でのその途上性において、**絶えず繰り返し、**それに対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神・キリストの福音を尋ね求める「**神への愛**」と、そのような「神への愛」を根拠とした「**神の讃美**」としての「**隣人愛**」（この「隣人愛」は、自己欺瞞に満ちた市民的観点・市民的常識における通俗的なそれではなくて、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請のことである）という連関・循環において、**イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」**共同性を目指すところに存在する、と（すなわち、**その教会は実体ではないから、その教会は、絶えず繰り返し、そういう仕方で**、教会＜**となる**＞ことによって教会＜**である**＞ところの教会共同性を目指すところに存在する）。まことのイエス・キリストの「教会は、〔前述したような仕方で〕人間が神に聞くというこの一事によって――神が人間に語り給うゆえに聞き、神が人間に語り給うことを聞くというこの一事によって、基礎づけられ、支えられているのである。（中略）このことが起こるところ、そこではたとえ二人三人の集まりであっても、またこの二人三人が決して選り抜きの人でなくても、また高い水準にさえ達していなくても、またむしろ人間の屑に属する者であるようなことがあっても、教会は存在する」、それ故にそうでない時には、「どのような大群衆をその中に擁し、〔学業的優等生の大学社会の学者や人間的奉仕の優等生の奉仕家等々〕どのように優れた個人をその中に擁していても教会は存在しない。またそれが、もっとも豊かな生命を示し、国家と社会において、どのように尊敬されようとも教会は存在しない」（『啓示・教会・神学』）。

それだけではなく、ヨブは、その「**ヨブの苦しみや嘆きにおいて**」、「**ゲッセマネとゴルゴダの苦しみと嘆きを引き受け給うたイエス・キリストの証人**である」。すなわち、ヨブは、この意味でも、「＜**ただひとりの真実の証人そのものであるイエス・キリスト**＞**の証人である**」。「＜**ただひとりの真実の証人そのものであるイエス・キリスト**＞」**においては、「人間の偽りは煙のごとく、ただちに一切の香りを失う」**。そのイエス・キリストにおける神の自己啓示においては、われわれ人間の個と現存性（人間の個の時間性、個体史、自己史）――われわれ人間の類と歴史性（人間の類の時間性、人類史、世界史、歴史）の生誕から死までのすべてが裸形化され明るみに出されるのである、それ故に「この世の偽り、通俗の偽りを偽りと呼び、世俗的真理をも正直に受け取ることができる」、現在情報科学や情報技術の進歩・発達によってさらに加速している際限なき人間の欲望が裸形化され明るみに出される、「神人協力説」のベクトルを持つ自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教における福音が、「理念へと、有神論的形而上学へと、われわれに管理されるプログラムへと、鋭さをなくした

十字架象徴論へと、イエス・キリストはたかだか＜暗号＞にすぎない神秘主義へと変わって行く」ことが裸形化され明るみに出される。「**＜ただひとりの真実の証人であるイエス・キリスト＞」においては**、それが人間論的な自然的人間のそれであれ、教会論的なキリスト教的人間のそれであれ、誰のそれであれ、一切の「**人間の偽りは煙のごとく、ただちに一切の香りを失う**」のである。したがって、「**＜ただひとりの真実の証人であるイエス・キリスト＞」においては、「ヨブの三人の友人の敬虔なすがた、キリスト教的なすがたにおいて行われる」、「少しも神に身をゆだねることなく生き、生きつづけうるようになりたいという企て」**――すなわち、「**人間がキリストの福音を飼いならすという企て、キリストの福音を人間に帰化させる企て等偽りの原現象」のすべてが裸形化され明るみに出されるのである、「自分自身の自由と救いと滅びの免除にだけ関心がある三人の友人たちの訓育、牧会、典礼、説教にある偽りの原現象」のすべてが裸形化され明るみに出されるのである。**

バルトは、先ずヨブ記の全体の構成とユングの『ヨブへの答え』について述べている――ヨブは、死海の東あるいは東南のイスラエルの境界を越えたエドムの領域・ウヅの住人である。また、**ヤーウェとの関係でいえば、ヨブは、「イスラエルの神から『わがしもべヨブ』と呼ばれて祝福されている人物である」**。1・2・42章は、富裕なヨブが苦しみの只中でのヨブの神への真実、あらためて受ける神によるヨブへの祝福についての民間伝承・枠小説である。また、詩の3－31章、ヨブと三人の友人たちの言葉（特に25・26章）は、ヨブ記の中心部である。33－37章の詩形式のエリフの言葉、「たぶん40、41章のベヘモトとレビヤタンについてのヤーウェの口におかれた詩、その前におかれている38、39章の宇宙世界や、その他の特に獣の世界に……関する部分は、後からの挿入である」。最後には、28章のヨブの知恵の歌である。

ユングは41章（34節を引用）に依拠して、集合的無意識としての神・ヤーウェは、「動物的――自然的」であり、「あらゆる古代の神々と同様にヤーヴェもまたその動物シンボル体系を持って」いると述べている。因みに、吉本隆明によれば、経済社会構成を農耕に置いた人類史のアジア的段階の日本において非農耕民と同様に神人と呼ばれた天皇のそれは、白蛇である。バルトは、ユングの『ヨブへの答え』について、「人間的には非常に感動的な記録であり、職業的心理学者の心理学にとっては極めて啓発的でもある」が、「しかし聖書のヨブと聖書一般の解明のための寄与としては」、その叙述が心理学者然としており、ヨブ記を「冷静に読み、思索することができなかった」が故に、その「作品は望みなく全く不毛となっている」と述べている。吉本に依拠して言えば、ユングの作品は、人間にとって一面に過ぎない心理学的側面だけを拡大鏡にかけて全体化し絶対化した（形而上学的にその一面だけを抽象し固定化し全体化し絶対化した）集合的無意識に依拠して展開されたそれであるから、ヨブ記をトータルに読み解くことはできない。

ヨブの神との交わり〔関係〕における時間性は、始めと終わりについて言えば、「神

の祝福に満ちている」。しかし、その中間の時間性は「苦難に満ちている」。すなわち、この中間の時間においては、「ヨブに対する神の祝福は、乏しく最小限でしかなくなっている」。その時間におけるヨブの神への対応の在り方は、「自己是認や自己称賛とは何の関わりもない神への無比なる信頼であり、自分の身のためだけでなく、祭司的に、彼を取り巻く人々のための代理として、神に対して立っている（29 章・31 章）」。ヨブは、「敬虔な偽りの証言をした友人三人のために、とりなしの祈りをするという仕方において、神に対している（42 章）」。このように、「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型であるヨブ」の時間性における信仰の在り方は、「偽りを暴露するのみならず、敬虔な偽り者のためにとりなしの祈りをする」という点にある。ヨブのそれは、「誤ることがない神自身が、ヨブに力をそえる」が故に、その時「ヨブもまたあやまつことはできないし、あやまつことはない」という点にある。また、「神がヨブを『わがしもべ』と呼ばれるのは、ヨブがそう望んだり・そう望むからではなく、ヤーウェ自身が先行して喜んでそうするからそうなのである」という点にある。言い換えれば、神とヨブの交わり〔関係〕は、常に先行する「神の側からの自由な選びと意向」による、後続する「ヨブの側からの自由な服従〔他律的服従と自律的服従との全体性における神への自由な服従〕」という点にある。この交わり〔関係〕が、「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型である」。「自由に与え、また自由に取り戻すことができないなら、神は〔キリストにあっての神としての〕神でない」。したがって、「ヨブの神奉仕」は、「神の自由・主権・愛に服従する神奉仕である」――「神から幸いをうけるのだから、災いもうけるべきではないか」、「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。ヤーウェが与え、ヤーウェがとられたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」。したがってまた、このヨブは、「誤りうる人間として、不正をも行いまた不正でもあるということ」を認識させられ自覚的させられた人間である。

ヨブは、「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型である」が、＜真実の証人そのもの＞ではない、＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞、＜真実の証人そのものであるイエス・キリストの名＞ではない。イエス・キリストは、まことの神にしてまことの人間である＜真実の証人そのものである＞が、ヨブは、「神ご自身に呼ばれ祝福された」ところの徹頭徹尾ただの人間そのものとして、「＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型である」。徹頭徹尾ただの人間そのものとしてヨブが、「自由な神の自由な人間として人間的な可謬性を持ちながら試煉の地獄を通りぬけて行く危なかしい歩み」を歩んでいるのに対して、まことの神にしてまことの人間であるイエス・キリストは、その復活の出来事に包括された「十字架の死」の出来事――すなわち「ゴルゴタの屈辱を通りぬ

けることによって、**すでに勝利者であるという不可謬性の道を歩んでいる**」。「**イエス・キリストこそが、神の**＜**真実の証人そのものである**＞ある」ということは、その「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方におけるまことの人間「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」において、「この歴史の中で人間存在の真理〔「まことの人間」としての人間存在の真理〕を生きることによって」、その復活の出来事に包括された「十字架のすがたによって、ほかの一切の実存者は偽りであると暴露した」ということを意味している。このイエス・キリストの復活の出来事に包括された十字架を頂点とした地上の生・生活において、われわれは、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における神のその都度の自由な恵みの決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」と、その啓示の出来事中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で与えられる啓示認識・啓示信仰（信仰の認識としての神認識、人間的主観に実現された神の恵みの出来事）に依拠した信仰の類比を通して、「神に棄てられた者」、「神にたたかれ、苦しめられる者」、「闇に屈伏させられた者」、「敗北者の姿」を自己認識・自己理解・自己規定させられるのである。このようにして、「イエス・キリストは、われわれと現在ともに在すことができる」。「イエス・キリストの現在は、〔その復活の出来事に包括された〕十字架につけられた者の現在である」。すなわち、その「〔復活の出来事に包括された〕**十字架の姿において、**＜**神の真実の証人そのものであるイエス・キリスト**＞**は、われわれの人間の敬虔な偽りを暴くのである**」。その時、われわれは、「貧民窟、牢獄、養老院、精神病院、希望のない一切の墓場の上での個人的な問題……特殊な内的外的窮迫、困難、悲惨、現在の世界のすがたの謎と厳しさに悩んでいる（……これらが成立し存続するのは自分のせいでもあり、共同責任がある）闇のこの世以外には、何も眼前に見ないのである」――「**人間の人間的存在がわれわれの人間的存在である限りは**、われわれは一切の人間的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが、しかしそれと同時に、**人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは**、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何ものも眼前にみないということ――これが神の恩寵である」、「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子**の**信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰〔神の子**を**信じる私の信仰〕に由って生きるのではなく、神の子**が**信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある主格的属格として理解された「イエス・キリスト**が**信ずる信仰」によって〕生きるのだ＞ということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。（中略）自分が聖徒の交わ

りの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——**そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。**……**部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、＜われわれのために人として生まれ＞・＜われわれのために死に＞・＜われわれのために甦り給う＞主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである**」。したがって、キリスト復活と復活されたキリストの再臨（終末、「完成」）までの聖霊の時代に生かされているわれわれは、終末論的信仰の中において、復活されたキリストの再臨、終末、「完成」を待たなければならないのである、ちょうどドストエフスキーの『罪と罰』の中で終末論的信仰に生きたマルメラードフのように、あるいは吉本隆明に「あなたはキリストの＜復活＞、〔復活されたキリストの〕＜再臨＞〔終末、「完成」〕を信じているのですか」と問われて、「信じています」と答えた終末論的信仰に生きたカトリック作家・小川国夫のように。

さて、バルトは、「ヨブの悩み」について、次のように述べている——「**ヨブの悩みは、死への恐れではない**」。何故ならば、ヨブは、「自分の死を、神に求めているからである」。「ヨブ記」が、もしも「所有、家族、健康、安定、名誉の喪失に人間の生の無常を感じその無常に苦悩することを主題」としているのであれば、われわれは、「ヨブ記」を必要としない。しかし、「ヨブ記」の**ヨブは**、そうした無常を嘆き死を恐れているのではなくて、「**神との関係が断たれた闇への疾走、ただ滅び行くだけの生を恐れ、嘆き訴えている**」。「三時に**イエスは大声で叫ばれた**。『エロイ、エロイ、サバクタニ。』これは、『**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**』という意味である（マルコ 15・34）」。**＜この叫び＞は、＜イエスの苦難の総括＞である。この叫びの中に、「苦難の神のしもべの、＜真実の証人そのものである＞イエスと、「真実の証人の型、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型」であるヨブとの関連性がある。**また、「**ヨブの苦難、嘆きの対象**」は、次の点にある——第一に、その対象は、ヨブが、「**苦難の中で、神と関わりあわねばならないことを深く知っている知**」と「**そのことを深く知っていない非知**」との混在の中にあり、**その混在における争いにおいて、「ヨブは不正を行う」**という点にある。しかし、**ヨブは、「イスラエルの神から『わがしもべヨブ』と呼ばれて祝福されている」が故に**、すなわち常に先行する「**神がヨブから離れない」が故に、「ヨブは神から離れえない**」のである。したがって、「ヨブの側からの神への問いや嘆願は、全く無力である」。したがってまた、「最後には、ヨブはちり灰の中で悔いる」。また、第二に、その対象は、ヨブが、徹頭徹尾**常に先行する神の自由な選び**にあるのであって、後続する人間の自由な選びに基づいた契約関係の解消や廃止はないという点にある。したがって、その対象は、常に先行する神は、「**ヨブに与えていた祝福を、……はぎとり**」、「**隠蔽するという姿においてヨブと出会う**」という点にある。したがってまた、その対象は、徹頭徹尾神の側の真実の

中における**神とヨブとの関係性の変容**という点にある。したがってまた、ヨブは、そのことが、徹頭徹尾神の側の真実としてあるが故に、その「神に対して不真実になるわけにはいかない」が故に、その「真実の**神の隠蔽性**の只中で、苦難のしもべヨブは、苦しみながらの服従をする」のである。外皮的皮相的な「偽りの善において神なきことは、ヨブとの対決においてあばかれ仮面をはがれた彼の友人たちの敬虔と神学である」。この「偽りの敬虔と神学」は、「神なきことは、善においても神なきことであって、神なきことであるのをやめない様式である」。ヨブのドラマは、「人間の偽りは煙のごとく、ただちに一切の香りを失う者の証人」、「苦しまれ、十字架につけられ、〔その復活に包括された十字架の死の出来事において〕死して葬られた神の子にして人の子なる、**＜ただひとりの真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞**の**真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型**である者のドラマである」。

　その「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在――すなわち「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間**イエス・キリストこそ**が、「**受難から続く**〔復活に包括された〕**十字架の死の絶対的沈黙、死の沈黙を、その復活において打ち破り、克服された唯一無比の方である**」。この「**イエス・キリストの復活**」**は**、「**彼が神性を本質としているということ**」**を**、また「**彼の言葉は神ご自身の言葉であることを示している**」。バルトは、「霊（プニュウマ）とは、パウロの人間学においては、〔生来的な自然的な〕人間実存の不可視な精神的生の要素である魂（プシュケー）とは違うが、キリスト者に洗礼の際に贈られる、イエス・キリストとの交わりのことであって〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいたイエス・キリストとの交わりのことであって〕」、「その霊に基づいてキリスト者は初めて、新しい真実の主体となる〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事を終末論的限界の下で与えられた新しい真実の主体となる〕」という意味を与えている、と述べている。したがって、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした、その復活の出来事に包括された「十字架につけられたイエスはこの世界に向けられた神の言葉であると証しするキリスト教会」は、「キリストの永遠のまことの神性の告白を信用するし」、勝利の福音を、それ故に「復活を信ずると告白する」のである、それ故にまた復活されたキリストの再臨（終末、「完成」）を待ち望む終末論的信仰に生きるのである。何故ならば、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キ

リストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造が、われわれに対して、その総体的構造における神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて、その信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事を終末論的限界の下で授与するからである。このような訳で、そのイエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの教会は、われわれ人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍、時代や時勢、「同時代の人たちの思考の前提」、「そこから形成された理解の規準」に乗り依拠し模倣した様々なキリスト教の自然的な信仰・神学・教会の宣教のように、近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の自然的な信仰・神学・教会の宣教のように、「キリストの永遠のまことの神性の告白を信用しない」ことは決してないのである、キリストの復活を、復活されたキリストの再臨（終末、「完成」）を信用しないことは決してないのである。

その死と復活の出来事における「イエスの受難とは、神は、イエスを棄てた者であるとともに、そのイエスにおいて自分自身をも棄てるものである」ということである。その復活の出来事に包括された「十字架につけられた〔まことの神にしてまことの人間である〕者の語りかけ」は、「だれもそれを他人に言うことはできないものである」から、もしも生来的な自然的な人間がそれをお互いに言うことができるとするならば、「人間がお互いに言うことができるのは、人間の理念であり、世間的情報でしかないのである」、人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者」、人間の意味的世界・物語世界、「存在者レベルでの神」にしか過ぎないものである。言い換えれば、その「**イエスの語りかけ**」**は**、「彼の聖霊の力によってしか聞かれることはできないものである」、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における**神のその都度の自由な恵みの決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」とその啓示の出来事の中での主観的側面である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいてしか聞かれることはできないものである**。したがって、その「**イエスの語りかけを宣べ伝える**」**時も、それは**、イエス。キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における主観的な「認識的なラチオ性」を包括した「存在的なラチオ性」――すなわち、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下で絶えず繰り返し、他律的服従と自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神・キリスト

の福音を尋ね求める「**神への愛**」と、そのような「**神への愛**」**を根拠とした**「**神の讃美**」**としての**「**隣人愛**」**という連関・循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの**「**ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会**」**共同性を目指して行くところでしか聞かれることはできないものである**。そのイエスの「**聖霊**〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての聖霊〕**は**、それ自身『力〔「慰め主としての霊」、「真理の御霊」、「キリスト教原理を覆いをとって明らかにする霊」、「キリストについて語ることができる能力」、「証しの力」〕であり、……その力によって神の言葉、真理の言葉が、ただ神のうちにあるだけでなく、**神が欲する時と所で**〔神のその都度の自由な恵みの決断により〕、**神から出て**、われわれ人間にはいりこみ、……いくらかわわれわれの信仰、われわれの認識、われわれの服従という……収穫をえて、**神にかえっていく**』だけである」。したがって、「聖霊は、人間精神と同一ではない」し、「人間が聖霊を受けることを許され、持つことが許される場合、（中略）そのことによって、決して聖霊が人間精神の一形姿であるなどという誤解が、生じてはならない」し、聖霊によって更新された理性も聖霊と同一ではないのである（『教義学要綱』、『バルトとの対話』）。

そのような訳で、教会の宣教における人間の説教は、それが「たとえ聖書にかなう〔聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした〕宣教や最も純粋な教説であっても」、「それ自体は神の言葉では全くない」から、「それ自体を神の言葉とすることはできない」のである。したがって、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としない宣教や教説それ自体は、「神の語りかけを聞く妨げになる」のである。このような訳で、バルトは、『教会教義学　神の言葉』において、次のように述べている――教会の宣教（その一つの補助的機能としての神学）における思惟と語りが、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではないのである」、それ故に教会の宣教（その一つの補助的機能としての神学）における思惟と語りと行動は、「『主よ、私は信じます。私の不信仰を助けて下さい』というこの人間的態度〔「祈り」の態度〕に対し神が応じて下さる〔「祈りの聞き届け」〕ということに基づいて成立している」のである、と。キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞において、そのように思惟し語らないならば、「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、「（中略）神の啓示の内容は、神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。（中略）こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外

の何物でもない！』……」（『キリスト教の本質』）、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」（『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演　下」）、とフォイエルバッハから、客観的な正当性と妥当性とをもって、根本的包括的に原理的に批判されてしまうであろう。その時には、「新約聖書の釈義に役立つ新しい哲学的な鍵を、前期ハイデッガーの哲学原理に見出した」ブルトマン（ブルトマン学派）に対して、客観的な正当性と妥当性とをもって、根本的包括的に原理的に「揶揄」（批判）したハイデッガーから、「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』」（木田元『ハイデッガーの思想』）、と言われてしまうであろう。

「神はヨブに敵対していながらも、彼に味方している」ことに基づいて、「ヨブはヤーウェに反抗（不正）しながら、自分を告発している神へと逃げる道（正しい道）へと歩みを進める」。「**神のしもべであるヨブの苦難の問いに対する答え**」**は、「知恵に属することであり、またその知恵が神に属する事柄であれば**〔換言すれば、その知恵が、神的愛の完全性における、「失われない差異性」における三つの存在の仕方（業・働き・行為、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）におけるわれわれのための神としての神の忍耐と、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする自己自身である神として神の知恵とにおける知恵に属する事柄であれば〕」、ヨブはただ神に信頼し固執し固着して、**終末論的信仰において答えを持つ道へと歩みを進める以外にない**のである。主は、「テマンびとエリパズに言われた、『わたしの怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。あなた方が、わたしのしもベヨブのように正しい事をわたしについて述べなかったからである』」。この時、「神は、ヨブを保証する者、弁護する者、保護する者である」。また、この時、「**神が、ヨブの証人であり、神の真実でありつづけた・真実でありつづける選びに基づいて、不正と正しさを告発されたヨブは、正しいイスラエルであり、＜真実の証人そのものであるイエス・キリスト＞の真実の証人、真実の証人の基本構造、真実の証人の一つの型**である」。

詳論は下記で展開：
https://think-imagine-judge.blog.jp/
あるいは
https://christianity-church-barth.info/
この PDF 版は、上記のホームページやブログにある＜再推敲＞・＜再整理＞した論稿を、さらに＜再推敲＞・＜再整理＞して作成した論稿である。